

# 信 毎 歌 壇

## 米川 千嘉子 選

町中にフラッグバーはためいてバルコは次の始まりを待つ  
(松川村) 谷川 利音  
父は踏む踏んでも踏んでも積もる雪通学バスの停まる場所まで  
(千葉県船橋市) 清水 渡  
夫と居て一か月もの仲違いさでどうやって話し掛けよう  
(塩尻市) 丸山 華子  
ティータイム認知症患者「友見舞い」旦那だすきに笑いと拍手  
(松本市) 溝上ひろみ  
凶行が近くで起こりし乗り場から帰宅の途につく  
(長野市) 松本 博人  
献花の後に  
(長野市) 松本 博人  
娘を亡くす悲しみ共に味わいし夫も逝きは十五年過ぎ  
(小諸市) 徳原 昭枝  
亡き夫のお気に入りの歌集読み返す鉛筆のしるしに共感あらた  
(松本市) 古藤 良枝  
幼き日紙突きせしかの川よタンフ行き交う護岸工事の  
(箕輪町) 佐々木安教  
世話をやき娘に吐られて辞書に引く「冷や水」苦し高齡われは  
(上田市) 小林さよ子  
相撲取り一日一番命を掛ける俺も同じ杖突き歩く  
(飯綱町) 羽入田弥山  
佳作  
鉛筆の先のだんだん丸くなる鎮めるように日記書くとさ  
(松本市) 上嶋 晴美  
辞書をひくたび思うなり「誤字あるなど」以てのほか  
(長野市) 池田よし江

選評  
第一首、松本市の商業施設が閉店。それを知らせる旗や幕が次の飛翔を待つようにたなびくのだ。第二首、子どもたちのために繰り返し踏み固めてくれる。まさに雪との闘いだ。第三首、夫婦げんかを一カ月も続けるのはそうとうエネルギーが要る。夫もきつかけを探っているはず。私は一日ももたないです。第四首、夫への思いは確かだから昔と同じように心も言葉もあふれる。素直な感動がある。

## 小池 光 選

晩年の父はハモニカ吹くだけにシベリアのこととして話さず  
(長野市) 富崎 雄  
美しき形とおもう茹であがるまでの卵をろがしてをり  
(長野市) 原田りえ子  
降る雪に似て音もなく時過ぎるを老いてなお増す姉妹のきずな  
(長野市) 北沢 京子  
後少し生きていたなら今の世を何んと語らんアンネフランク  
(麻績村) 小山みよ子  
風邪ひくと母が布団に持ってきたホットミルクの湯気の恋しき  
(茅野市) 三好 碧  
吹雪く夜は音量上げてビートルズ聞く一人居の氣ままな暮らし  
(松川村) 岡 豊村  
胡蝶蘭咲きたる朝の輝いてけふは良き事あるかも知れぬ  
(小海町) 依田 久代  
忘れゆき忘れゆくも安けしや今日の茜がここにうるはし  
(長野市) 近藤 光子  
遠い遠い昔がそこにあるような三國連山すかつと雪晴  
(飯山市) 柳本 良子  
寒雀並び寄り添ふ電線に降りしける雪染しむように  
(長野市) 山田登志夫  
佳作  
足下に今落ち来たるまつぼくり鮮度の良きを見てとばかりに  
(安曇野市) 東野 行岳  
「このごろは畑で草とも語らずだ」語りし老友逝く春を待たずに  
(千葉県船橋市) 清水 渡

選評  
第一首、あまりに悲惨だったことを人は語らない。晩年の父はよくハモニカを吹くだけだった。おもかげが浮かぶようである。第二首、なにも思わず食べている卵だがよく見ればその形はすばらしい。完璧である。何げない歌だが新鮮な発見がある。第三首、きょうだいがいることはありがたいことだ。老境になっていよいよそのきずなが増す。降る雪を見つつ2人はふかく結ばれている。

## 小島 なお 選

動くものばかり集めて地球浮くわれ在るかぎりきみ芯柱  
(小布施町) 市村志津枝  
プロコリーを樹木にみたてこの朝の皿の上には春の萌しを  
(中野市) 増田きみ江  
暗がりのストーブ点ける手元へと婿のくれたるスマホの明かり  
(松本市) 溝上ひろみ  
セルロイドの小五の夫のお針箱待ち針金てに小さき名前  
(佐久市) 佐藤千栄子  
きざらぎの既読だけ付く子のライン節分の豆ひたすら摘まむ  
(長野市) 伊藤かつみ  
降る雪が雨水に変わる頃なれば痛める足もやさしさの増す  
(長野市) 黒柳 響子  
斑雪輝く伊勢山南木曾岳電鉄管黒く並びて  
(南木曾町) 堀 進  
レジを打つバイトの女子のラメネイル釣り銭二円つめめず落とす  
(千曲市) 石黒 信幸  
節分に諏訪湖一周ランニング走りは基本と中一の孫  
(伊那市) 小坂 明子  
信州の炬燵這い出て東京へ門前とらの草団子食う  
(坂城町) 柄沢 満則  
佳作  
わが家の三和土の土間に咲く椿冬のアンニユイ慰めくるる  
(麻績村) 塚原ふじ子  
相棒のマイアイゼン今は用もなく下駄箱の奥眠りこけたり  
(飯綱町) 小林 紀子

選評  
第一首、宇宙に浮く地球も、地球上の人も海も陸もたえず動き続ける。けれど、きみが私の柱となり支えてくれる。第二首、もこもこミニサイズの樹木がいちはやく食卓に季節を告げる。春は味わうことから。第三首、スマホの画面をライト代わりにして手元を照らしてくれた。優しい人の優しい手。第四首、待ち針のぜんぶに書かれた小さな小さな名前たち。夫もお針箱も大切にされてきたのだ。